

山 部 赤 人 論 (二)

—「赤人の歌四首」について—

岡 田 喜 久 男

一

山部赤人の歌の頂点であり、終着点でもあったと考える、卷八の歌六首、就中「山部宿禰赤人の歌四首」(一四三二四~二七)について論究する時、彼の出自、経歴、万葉集中の実態、後世の評価なども確実に把握すべきであるが、赤人の場合も、柿本人麿や高橋虫麿同様客観的な資料が極めて少ないので、結局は赤人の歌をいかに考へるか、即ち一首一首の解釈が最も重要な事となるのである。以下私がいかに「山部宿禰赤人の歌四首」(以後「四首の歌」と呼ぶ)を理解しているかを述べてみたい。ところで、卷八の六首は他の巻の赤人歌に比べると、題詞や左注が何等作品を説明していない事が特徴的である。元来、卷八自体が歌を四季に分け、更に各季を雑歌と相聞に分けるという分類法を採っているので、編者の興味もこの集中でも新しい分類法に従って歌を判定し、年代順に並べようとする点に置かれている。少数の例「式部大輔石上堅魚朝臣の歌」(一四七二)、「佛前の唱歌」(一五九四)大伴坂上郎女の歌に「和ふる歌」(一六五七)以外は、作者名、時折作歌年月を書くのが通例であ

山部赤人論(一) —「赤人の歌四首」について—

るが、赤人の場合も名前を示すだけである。ただ個人の歌が四首もまとまっているのは、卷八の中で「山上臣億良の七夕の歌十二首」(一五一八~二九) —これ等の歌は養老八年から数次に分けて詠まれている—を除くと「天平八年丙子秋九月作」の左注を持つ「大伴家持の秋の歌四首」(一五六六~六九)があるだけなのが注目される。これはまさに、卷三雑歌中に「柿本朝臣人麿の羈旅の歌八首」と「高市連黒人の羈旅の歌八首」が十三首を隔てて載せられているのを思わせる。後に述べるが、卷八の編者と思われる大伴家持が赤人を意識しただろう事を容易に想像させる事実である。

二

春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける (一四二四)

この歌については従来幾多の論義が為されているし、未だに定説を見ない歌である。表面には難訓難語のある歌とは思えないが、ごく普通の語句と見える、「すみれ摘みにと」「一夜寝にける」の解

歌、それを受けての一首全体の意味の取り方は様々である。更にこの歌の理解は後三首の方向を決定するものであるから、それだけに慎重に考えなければならない。無心に一読してみれば、語句の美しさ、情景の艶麗なこと、普通の「万葉風の歌」でない事は明かである。「春の野、すみれ摘み、野をなつかしみ、一夜寝にける」といずれも春や恋愛の美的表現を代表するものである。今日ならば「あまりに美しい景物を出しすぎていて、作り物めき焦点が定っていない。」と批評されるのではなからうか。今日以上に、奈良朝の人達にとつても極めて新鮮な感覚の歌であつたに違いない。それは「すみれ」の用例が「つぼすみれ」の二例を含めても集中に四例しかない事、「すみれ」の他の一例が、天平十九年三月五日作の、大伴池主の長歌（三九七三）で、

：里人の 吾に告ぐらく 山傍には 桜花散り 貌鳥かほどりの間な
くしば鳴く 春の野に すみれを摘むと 白袴の 袖折し反し
紅の 赤裳裾引き 少女らは 思ひ乱れて：

と歌っている。この歌は注目されるべきである、と言うのは、この歌は大伴家持の「山柿之門」の語を前文にもつ長歌（三九六九）への返歌で、家持の歌を「山柿の歌泉は此に比ぶれば幾なきが如し」と絶賛している前文が付いているのである。次の歌の所でも述べるが、巻十七に載せる右二首の長歌および反歌は、赤人の「四首の歌」と密接な関係があるようで、家持、池主の当代きつての二人の文人が赤人を撰取していた事は赤人歌の新しさを意味するのではなからうか。山柿の「山」を山部赤人と考える私にとって、ここで池主が「すみれ摘み」を少女達の野遊びの情景として描いているのは

赤人の歌に対する一つの手掛りであると思われる。即ち本来「すみれ摘み」は女性の行うものであつて、男がその為に野に来る事は考えられず、それだからこそ赤人は大胆に「すみれ摘みに」来たところである。男性にあるまじき振舞いを歌うことで虚構の世界を造りあげたのである。又「すみれ」が実用であるか否かで説が分かれるが、「代匠記」が「和名抄」の野菜類董菜に「本草云、董菜俗謂之董菜董菜須臾、和名」とあるのを引いて

野菜なる故に摘て花をも兼るなるべし、後々の歌には飲食を賤しめばにや、花故に摘やうにのみよめり、

と述べているのに従いたい。その生活次元の目的をもつて来た作者が、すみれの盛りの野の方に愛情を覚えたとしている所が第二の虚構であつた。自然を「なつかしむ」歌としては巻七譬喩歌の中に 譬が根こころの凝しき山に入り初めて山なつかしみ出でかてぬかも

(一三三二)

があり、結句の「出でかてぬかも」が赤人歌の「一夜寝にける」に似た発想をしているが、巻七の歌は、

心にしみぬ婚姻したのに譬へたのであらうか。かうした心持は今の民謡にも時に見られる。或は単に恋愛を恐しいものと思つて居たのに、始めて見ればの意であらうか。後者の方が自然かも知れない。土屋文明著「萬葉集私注」

これは身分高い女に關係を結んでいる男の訴えで、「譬が根の凝しき山」は身分の高い女、「入り初めて」は、夫婦關係がつき始めたこと、「出でかてぬ」は、關係を絶ち難いことで、いずれも譬喩である。窪田空穂著「萬葉集評釈」

などの解説が示すように、完全に恋の歌である。然し私は赤人の歌を相聞発想の歌とは考えていないので、と言うよりそこを踏まえて越えていたと思っているので似て否なる歌であると考ええる。「一夜寝にける」については、古代文学に散見する「一夜の共寝」と関係付けても考えられるが、赤人の心としては純粹に景色に魅了されて「一夜泊ったことだ」と歌っていると見たい。と言うのは同じ発想の内蔵忌寸繩磨の歌

いささかに思ひて来しを多帖の浦に咲ける藤見て一夜経ぬべし

(四二〇一)

があるし、赤人としては記紀以来の相聞的語句である「一夜寝」を単に「一泊」の意に転用する事で複雑なイメージと強い印象を歌おうとしたのである。考えてみれば、幸行供奉を繰り返した大の男が、「すみれ摘みに来て感動して一泊してしまつた」などと歌うのは極めて大胆異例のことである。やはり事実として考えるよりも武田祐吉著「萬葉集全註釈」に

春の野にスマレを採みにきて一夜宿たということが、いかにも仰山である。これは既に文雅の思想がさかんであつて、野辺の風情を強調しようとして、かような作を成すに至つたもので、歌われている内容は、かならずしも事実ではないであらう。たまたま何か旅行のおりなどに、一宿したことのあるのを回想して、かような表現を取つたものと考えられる。

と言うように美的観念の具像化と考えるべきであらう。

以上見てきたように、確かに語句には相聞的情緒が満ちているが、赤人はそれを自然界への愛情表現として転換させて歌っている。こ

山部赤人論(一) — 「赤人の歌四首」について —

の歌は古今集仮名序の注に「わかか浦に」(九九九)とともに赤人の代表作品としてあげられている他、古今和歌六帖、赤人集、続古今集、夫木抄に載せられているし、源氏物語の真木柱、椎本(「野をむつまじみ」となつて)に引歌されていて平安朝以降愛された歌であつたことが分る。真木柱の巻では、冷泉帝が玉壺を「野」に置えているように、平安朝の人にとっては恋愛的存在でもあつた。

三

あしひきの山桜花日並べかく咲きたらばいと恋ひめやも

(一四二五)

この歌については評価の差が激しい歌で

線は細いが調べが張つて、品をもつた歌である。

(萬葉集評釈)

桜花の盛りの短いのを惜しむ心であるが、平板な上に、言ひまはしに理が這入つて来て、嫌味をさへ感じさせる。赤人の作中でも低俗なものである。(萬葉集私注)

のように様々に受取られている。それは一重にこの歌の新しきによるもので、前歌と同様これも謂わゆる「万葉風」や、まして「ますらをぶり」では決してない。「山桜花」の語は集中数多くありそうであるが、実は家持の、前に挙げた「更に贈る歌」(三九六九)の反歌あしひきの山桜花ひと目だに君とし見れば吾恋ひめやも

(三九七〇)

に唯一回出てくるだけの特殊な語である。ここでも、家持周辺との

関わりが窺えるが、意味としては「山の桜」にすぎず、山の桜を詠んだものとしてはむしろ、高橋虫麿の「春三月、諸卿大夫等の難波に下りし時の歌」（一七四七・五〇）や「難波に経宿りて明日還り来し時の歌」（一七五一・二）の方が遙かに意を盡している。ただ赤人の工夫は「日並べてかく咲きたらばいと恋ひめやも」と言う部分で、万葉の歌としては確かに理に傾いているが、古今集の中に入れたら恐らく何等目立つ歌ではない。例えば

まてといふに散らでしとまるものならばなにを桜に思ひまさまし

(七〇)

などに通じると言える。然しながら万葉の歌としては五味智英氏（註三）があり得ぬことを敢えて仮定し、更に反語で受けるといふ紆余曲折が、桜の美しさにまともに対して居ない作者の智巧的態度を示して……

と言われるように、自然とまともに向き合っていない、理知の歌である。桜を賞でる気持は日本書紀に允恭天皇の御製として

明且に、天皇、井の傍の桜の華を見そなはして歌ひたまひしく
花妙し 桜の愛で 如此愛でば 早くは 愛でず 我が愛づる
子ら

皇后聞こしめて、且大きに恨みたまふ。

と歌われているのが最古である。この歌は、允恭天皇が衣通郎姫と一夜を過ぎられた後朝に歌われたもので、おりから井の側に咲き誇っている桜を見て、姫の美しさを桜に譬えられたものである。桜の散ることの早さを感じて、なぜ雷のうちから賞でなかったのか、と言う所に赤人の歌に通じるものがあるが、さすがに古い謡いものの風

を伝えている。

万葉中にも桜を詠んだ歌が四十首程あるが、虫麿の歌のように山の桜が高度によって咲く時期が違うと細やかに歌うことはなく、多くは雨や風に散る桜の、盛りの短かさを素朴に嘆くものであった。足代過ぎて糸鹿の山の桜花散らずあらなむ還り来るまで

(一一二)

春雨のしくしく降るに高円（たかまど）の山の桜はいかにかあるらむ

(一四四〇)

あしひきの山の間照らす桜花この春雨に散りゆかむかも

(一八六四)

などを見れば、花を愛する気持は伝わるものいかに率直である。赤人のように「毎日このように咲いていたなら」と歌うことは、気持としては万人共通のものであるが、極めて斬新なものであった。記紀の中でも木の花の散り易いことを「木花知流比売」と木の花の咲く美しさを「木花之佐久夜毘売」と名に変えている。「木花之佐久夜毘売」は「石長比売」と対になっていて、邇邇藝能命に奉られた二人のうちで、「石長比売」がその「甚凶醜きに因りて」送り返された時、父の大山津見神は「大く恥ぢて」

我が女二たり並べて立奉りし由は、石長比売を使はさば、天つ神の御子の命は、雪零り風吹くとも、恆に石の如くに、常はに堅（かき）はに動かず坐さむ。亦木花之佐久夜毘売を使はさば、木の花の栄ゆるが如榮え坐さむと宇気比弓貢進りき。此くて石長比売を返さしめて、独（ひとり）木花之佐久夜毘売を留めたまひき。故、天つ神の御子の御壽は、木の花の阿摩比能微坐さむ。」といひき。

と言っている。木の花（恐らく桜がその中心ではなかったろうか）の美しくも盛りの短かいことと、石の永遠性とが、明瞭に比較されて論じられている。やがて日本文学の主題となる、「花鳥風月」の最初に挙げられる花であるが、万葉においては鑑賞用以外の花がかなり多く、純粹に「見るためのもの」として歌われているのは新しい見方だったようである。

この歌も古今和歌六帖に

足曳の山桜花日並べて斯咲きたらばいと恋ひめやは

又新千載集にも

足引の山桜花日を経つゝかくしにほはゞわれ恋ひめやも

と載せられていて広く伝わっていたことが分る。

四

わが背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えす雪の降れば

（二四二六）

この歌も最初の歌と同じように、解釈が大きく分れる歌である。それは専ら初句の「わが背子」をどう考えるかによるものである。

萬葉代匠記……此吾勢子は妻なり、

萬葉集略解……ウガセコは友を言ふ

萬葉集評釈……「吾が背子」は、本来女より男を最も親しんで呼ぶ

称であるが、転じて男同志の間にも用いられるに至ったもので、用例が少なくない。これはそれである。

萬葉集私注……ウガセコは親しい友人とも見えるし、此の歌が女

山部赤人論(二) — 「赤人の歌四首」について —

性の為の代作であるとも見られる。

などが代表的な意見であろう。「時代別国語大辞典上代編」に

せこ〔背子〕（名）男子を親しみ呼ぶ称。ほとんどが妻から夫に
対している、ウガセコとして現われることが多く、ウギモ（コ）
と対する。

と言うように、万葉集の用例を調べると、本来女性が愛情を込めて
男性を呼ぶ表現であったことは確かである。ただ数は少ないが母が
子を、姉が弟を、更には男が男を呼ぶ時にも用いた例が出てくる。
特に男同志の例を探すと、

石川大夫が長田王を（二四七）、藤原房前が大伴旅人を（八一二）、
高丘河内連が恐らくは大伴家持を（一〇三九）、庵君諸立が友人を

（一四八三）、藤原宇合がその友人を（一五三五）、大伴池主が大伴
家持を（三九七五）、家持が池主を（四〇〇七）、家持が池主を（四

〇七七）

などが見出される。特に大伴家持関係歌が多いのは、こう呼ばれる
にふさわしい人物を必要としたのか、或いはかなり流行した新しい
用法だったのかなどの想像がされるが、万葉集四期になると、男同
志でも「ウガセコ」と呼びあっていた事は確かである。中でも家持の

西北の隅の桜樹を詠ひ云ふ

わが背子が古き垣内の桜花いまだ含めり一目見に来ぬ

（四〇七七）

は、赤人歌の気持に通じるもので、しかも初句に同じ「わが背子」
を持つところから両首は関係が深いと思われる。それは最後
にもう一度考えるところとして、これだけの用例がある以上、赤人の歌を、

女性の立場に立つての作とする必要はない。勿論、赤人が「背子」の語に対して、女性が使う語であるとの認識がなかった筈はなく、敢えて使うことによつて歌により艶麗なイメージを与えようとしたのであろう。

美しく咲く花を、独り見るのではなく、恋人や友人と共に見たいと思うのは常に愛らぬ人情のようであるが、梅が雪によつて隠されている、と歌うのは集中

梅の花それとも見えず降る雪のいちしろけむな間使遣らば

(二三四四)

位で、他は雪と梅との取り合せの点では同じであるが、両者を見間違えると歌うのが普通である。その例は巻八に

わが岳に盛りに咲ける梅の花残れる雪をまがへつるかも

(一六四〇)

沫雪に降らえて咲ける梅の花君がり遣らばよそへてむかも

(一六四一)

など他にも例が多い、当時白梅の美しさが雪と競う様子を

雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがも(八五〇)と歌うのは、もはや常識的表現だった。有名な巻五の「梅花の歌三十二首」の中でも雪と梅は「降る雪と人の見るまで梅の花散る」

(八三九)のように歌われている。赤人の歌もこれ等の歌を更に誇張したのであって、決して美景ではない。この趣向は古今集の

心あてにをらばやをらんはつしものおきまどはせるしらぎくの花

(二七七)

をすぐに思い出させる。又早く鴻巣盛広著「萬葉集全釈」が指摘

し、「萬葉集注釈」が

古今集(六)に

梅の花それとも見えず久かたのあまぎる雪のなべてふればとあるのはこの歌と、

梅の花それとも見えず零る雪のいちしろけむな間使やらば(十・

二三四四)

などによつたものである。

と言うように、古今集に近いものである。「雪に隠された梅」は古今集の詞書に

今集の詞書に

梅の花に雪のふれるをよめる(三三五)

雪のうちの梅の花をよめる(三三六)

千載集の詞書に

梅の木に雪のふりけるに鶯のなきければよめる(一六)

と引き継がれて行つた。単に梅を雪と見立てる巻五の歌と違って、親しい友と見ようと思つていた梅に雪が積つて梅を見せられない嘆

き、と見せて「雪中の梅」の美を歌つた赤人の歌はまさに平安朝和歌の先駆であつたことは以上の事で明かである。

五

明日よりは若菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪はふりつつ

(一四二七)

赤人の興味の中心が「昨日、今日、明日」の三語を一首の中に使うものであつたことは確かである。同様の歌は

前日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも

山の峽其處とも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れば

前年の先つ年より今年まで恋ふれど何そも妹に逢ひ難き

妹もわれも一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつも

などがあって、時間の流れを具体的に、又数字を並べたりする機智の歌は数多く見られる。今日から考えると、実感のなさ、技巧の露さが目立って、とても高い価値は与えられそうもない歌の類であるが、奈良朝の歌人達は競ってこのような作に挑戦している。それは実実感の世界から理智の世界への第一歩だったようで、あたかもゲームに挑むように手腕を示している。その様子は巻十六の長忌寸意吉磨の八首の歌（三八二四～三一）にはつきりと見る事が出来るし、左註（三八二四）にそれを楽しんでいた人々の存在が鮮かに書かれている。

原文「春菜將採跡」は古くは「わかな」と訓まれた。然し萬葉集古義が「尾張連歌」（一四二二）の歌のところで

春菜は、ハルナとよむべし、はる草、はる鳥、はる花など云
例多し、止由気宮儀式帳に、大神宮司、奉進春菜漬料塩二斛と見ゆ、

と言うように、「はるな」と訓む方がよいと思う。集中の用字も、若菜…一例、春菜…五例であるし、「四首の歌」が「春の野に…」

山部赤人論(一) —「赤人の歌四首」について—

と春に中心が置かれている所からも、素直に「はるな」と訓んでよいと思われる。菜を摘むことはいかにも女性の仕事のようであり、前歌に続いてこの歌も女性の歌だと考える事も可能であるが、仁徳記で天皇が吉備の黒日売に歌いかけた

山縣に 蒔ける菘菜も 吉備人と 共にし摘めば 楽しくもあ
るか

の歌——恐らくこの歌は民謡が採り込まれたものであろう——のうに、男女が共に菜を摘んだり、愛を交換したりしたようであるから、赤人の歌も、彼自身の事として考えて一向に差し支えない。然しこの「春菜摘まむ」も女性的であるし、今述べたように相聞的雰囲気には満ちている。

「標めし野」であるが、有名な額用王の「あかねさす紫野行き標野行き」（二〇）の歌のように実景を言う場合と、譬喩として用いられる場合があったと考えられる。なぜなら「標む」「標結ふ」は巻七の譬喩歌の中では専ら、女性を占有する意味に使われているからである。

思ひあまり甚もすべて無み玉禪炊火の山にわれは標結ふ

(一三三五)

葛城の高間の草野早領りて標刺さましを今そ悔しき

(一三三七)

三島江の玉江の薦を標めしより己がとそ思ふいまだ刈らねど

(一三四八)

山高み夕日隠りぬ浅茅原後見むために標結はましを (一三四二)
本来は、標識を施すという実用的な行為を、恋愛の場を持ち込むことは歌を作る人にとっての新しい試みであった。愛する人を確実に

自分のものとするための「標」、しかしそれは遅すぎたり、裏切られたりで屢々悔いを伴うものであった。その譬喩的な語を、本来の実際的な菜摘みのために「標めた」と歌ったのが赤人で、しかもその本意は金子元臣氏の「萬葉集評釈」が

しめし野は、野の一部にあたかも今の松茸山のやうななはばりでもしておいたものか、若菜つみもさうなつては、すこぶる殺風景な気がする。これは、心中に場所の予定をしておくといふのであらう。

というのが正しいと思う。同様の例としては、家持の

今日のためと思ひて標めしあしひきの峰をの上の桜かく咲きにけり

(四一五)

がある。即ちこの「標し野」の語句も、前に述べた、「すみれ摘み、一夜寝にける、いと恋ひめやも、吾が背子」と同じに、当時相聞の意味で用いるものであった語句を、再び生活次元のものとして用い、そこに虚構の美を築いたのが赤人であった。その為に色々な解釈を許すように見えるのであるが、実はただ一つの目的「美を歌う」「美的観念の具像化」に他ならなかった。家持の

三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ

(四〇七九)

はこの歌の下二句をそのまま使っていて、家持における赤人受容は、これまでの例も含めて相当深いものであったことが窺える。

赤人のこの歌は、古今和歌六帖、赤人集に初句第二句が「春立たば若菜摘まむ」となつて、又倭漢朗詠集、新古今集に「明日からは」として、夫木抄他にも載せられていて後世広く愛誦されたこと

が分る。金槐和歌集の

春立てば若菜摘まむと占置し野へとも見えず雪のふれば(新千載集には「春はまつ」)はこの赤人歌を本歌とするものであろうし、光孝天皇が「みここにおはしましける時に、人にわかなたまひける御うた」

きみがため春の野にいでてわかなくつむ我衣手に雪はふりつゝ

にも赤人歌の影響は大きいようである。万葉集では「春菜と春雨」の取り合せは赤人のこの歌以外にはないが——家持に「春菜と春雨」(三九六九)を歌い込んだものがある——平安朝以降は「春菜(若菜)と雪」の取り合せは殆んど常識的である。ここにも赤人の時代を先取りした姿がある。

六

ここまで「四首の歌」をいかに私が理解しているかを示して来たのであるが、四首全部に共通して言える事が幾つかあることが明かになったと思う。それをまとめてみると次のようになる。

一、相聞の表現が全首に共通して出ているが、赤人はそれを景色を讚美するものとして用いている。

二、誇張、仮定、機智などの理智的な表現が歌の中心をなしている。

三、美的存在が厳選されて並べられている。

四、赤人の歌以外では、万葉集にその情景を歌ったものが全くないか、極めてまれでありながら、平安朝以降ではむしろ常套的表現・内容である。

五、四首の歌と家持もしくは、家持周辺の歌人と関係がある。

六、「あしひきの」(一四二五)の歌を除く三首は、春の野とすみれ、梅の花と雪、春菜と雪、のように美的な情緒豊かな物の組合せが効果的である。

これだけ共通事項が挙げられるということになると、四首の歌が「ただ赤人の歌であるから並んでいるのだ」と考えるにはあまりに緊密すぎるのではなからうか。そこで最初の「山部宿禰赤人の歌四首」の題詞に戻ってこの点を考えてみたい。同じ巻八の秋の雑歌の中に家持の四首の歌があることは既に述べたが、「古事記」の中には四首一組のものが数回出て来る。

イ、八千矛の神が沼河比売と唱和した四首の歌謡は特に「神語」と呼ばれている。

ロ、神武記の、伊須氣余理比売に関する、短歌と片歌、片歌の問答の四首は物語を彩っている。

ハ、景行記に伝える倭建命亡き後の后たちの歌四首は「この四歌は皆その御葬に歌ひたりき。」と書かれている。

ニ、応神記の髪長比売の話も四首の歌が中心となっている。

ホ、雄略記の「引田部の赤猪子の話」も最後に「この四歌は、志都歌なり」とあるように四首で物語を完成させている。

以上の「古事記」の例は、全歌数百十二の中での例であるから、単なる偶然とは思えないが、いまそれに対する回答は私にはない。なお考えてみたい問題である。

万葉中に「四首一聯の歌」はと探してみると、
a、「輕太子の安騎野に宿りませる時の柿本朝臣人麿の作れる歌」

山部赤人論(一)——「赤人の歌四首」について——

(四五)の反歌(原文には短歌とある四六〇四九)が四首で構成の妙が賞讃される。

b、「磐姫の皇后の天皇を思ひて作りませる御歌四首」(八五〇八八)は山田孝雄著「萬葉集講義」が、

以上四首は本文としたる皇后の御歌にして四首連続して一の想をなせること甚だ巧なりといふべし。……若しこの歌真に皇后の御歌にあらずとせば皇后の御胸中を同情して人のつくれるにてもよし。或は又全別の歌を誤りて載せたりとしてもよし。四首一聯にして、その情の深切にしてその作の巧妙なることは作者のいづれになりたりとて左右せらるべきにあらざるなり。この四首を切りはなし、唯一首をとりにて論ずる如きはこの御歌の真の味を知れるものにあらざるなり。

と断言している。

四首一聯としては右の二つが有名であるが、
c、「弓削皇子の、紀皇女を思ふ御歌四首」(一一九〇二二)

d、「田部忌寸櫛子、大幸に任せらえし時の歌四首」(四九二〇五)

e、「柿本朝臣人麿の歌四首」(四九六〇九)

などの他、題詞や左注に「四首」と明記するもの、結果的に(問答などで)四首一聯となっているものなどかなりの数にのぼる。ただ、万葉全体からみればごく僅かな歌数であるし、必ずしも四首がとくに意図的に作られたと判断させる材料や、編者が注目した形跡はない。然し、右の例の中にも、男性の歌とするなかに女性の歌が入っている例があり、特にeの人麿の歌の後二首は明かに、女性、あるいは女性の立場で人麿が前二首に答えたものである。

このような歴史的な流れから見ると、赤人の「四首の歌」も何等かの構成や意図を持つていてはないかと考えるのは当然であるし、前に挙げたような共通性も充分である。それに対しては二通りの考え方が出来る。一つは赤人自身が四首一聯の歌として作ったと考える立場で、今一つは後人の誰かが四首をこのようにとりまとめた、とする考え方である。私は後者をよしとする者で、とても赤人自身の連作意識から生れた作品であるとは考えられない。何故なら、論文の中でも屢々触れたように、赤人の影響が大きかった家持は、最大の赤人理解者であり、信奉者であり、更には「山部赤人」創造者ではなかったかと考えるからである。私は、前にも少し述べたことがあるが、虫鷹、旅人、憶良などの歌人が極端とも思える位に、個性的であり得るのは各人の全体像が万葉に示されているからではなく、誰か、恐らく大伴家持を中心とする編纂者の手によって雕られ形造られたからではないかと考えている。赤人についても同様であつて、赤人の歌が全部残っている筈はないし、巻八で私達が読むのは、大伴家持の選りに選った結果であり、なかでも「四首の歌」は家持の考えでまとめられ並べられたと考えるのである。その一つの補強証拠となるのは、他の巻の赤人歌に四度も見出される次のような左注である。

1、右のものは、年月を記さず。但し玉津島に従駕すといへり。これに因りて今行幸の年月を検注して以ちて載す。(九一九)

2、右のものは、先後を審らかにせず。但し便あるをもちての故にこの次に載す。(九二七)

3、右のものは作歌の年月詳らかならず。但し、類あるをもちての

故に、この次に載するのみなり。(九四七)

4、右は、年月所處、詳審にすることを得ず。但し聞きし時のまにまにここに記し載するのみなり。(三九一五)

從駕の作がこのようにはつきりしない理由をどこに求めればよいのか分らないが、赤人の歌を適切な所に挿入しようとする編者の姿ははつきり認めることが出来る。もしその努力がなかったら、と考えると恐ろしくなるが、赤人歌に対してこのような注を付けたのは、(三九一五)の場合は確実に家持であるし、他の巻六の左注三つも家持と考えてよいのではないか。巻八についても大系本の各巻の解説で言うように家持が編集したと思われ、赤人の歌の中で、巻八の趣向に合い、春の景色を詠んだ歌を四首まとめて並べてたのである。山部赤人がもし自分で四首の連作として作ったのであれば、桜の歌と梅の歌は順序を逆にしたのではなからうか。

梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや
(八二九)

鶯の木伝ふ梅のうつろへば桜の花の時かたまけぬ(一八五四)のように、梅から桜へと詠むのが常識ではなかったらうか。恐らく、家持が古い順序に並べてみたものと思う以外にはない。かくて幸いにも、山部赤人が最後にたどり着いた、彼自身にとつてもこれこそ私の歌だと誇つたに違いない「四首の歌」は、良き理解者、大伴家持によつて巻八に正しく残され、後世広く愛誦されて行つたのである。

注一、一四二四、一四四四、一四四九、三九七三、の四首に出て

いる。

注二、「古事記」上巻の木花之佐久夜毘売の話を始めとして、神、

天皇などが乙女と「一宿為婚」する話。

注三、「山部赤人」(『萬葉集大成』9)

注四、拙稿「日本文学研究」第十四集「山部赤人論(一)」